



第121回 インドネシア紀行（その二）

前回は書いたように、2024年3月初旬にインドネシアへ学生を連れてプライマリケアの研修にいった。ジャカルタの東部に位置するスマラン市のディポネゴロ大学は鳥取大学医学部の協定校である。今回、お世話になったナニ・マハラニさんも大学院生として数年間を米子で過ごし日本語も堪能である。日本留学の奨学金を受ける際に、彼女は名探偵コナンの大ファンなので、迷わず鳥取大学に決めたとのこと。不思議な縁で結ばれたものである。

▼信じられない交通渋滞

最初は首都のジャカルタを訪問したが、信じがたい交通渋滞である。タクシーで観光地から戻ろうとしたがほとんど動かない。現地の人は、バイクタクシーでスイスイと渋滞の車の間を走り抜けていく。渋滞に業を煮やしたドライバーは、大通りから横町のほうへ入ろうとする。横町の入口では、怪しいおじさんが見張っていて、チップを渡すと通りに入れてくれる、狭い道を潜り抜けて、また大通りへ。なるほど、こういう抜け道があるのか。スマラン市でも、なぜか一般人らしきおじさんが、道の分岐点に立って、ドライバーからチップをもらい抜け道へ誘導している。かように、インドネシアの交通事情は混沌としている。

▼医学生の目の色が変わった

診療所やコミュニティセンター見学、そしてディポネゴロ大学医学部の学生とのグループ討議など、集中力を要する行事が続き、学生たちも疲れ気味だった。しかし、すべてを終えた医学生たちはとても満足げで、「ものすごく刺激になった」「インドネシアの学生に負けられないようにもっと勉強しないと」、目をきらきらさせて語るのである。そんな眼差しは、大学の授業ではついぞ見たことがない。なぜだろうかと興味が湧いた。先日、研修の報告会があり、学生から語られた言葉が印象的だった。

「インドネシアの学生は、学生であっても責任を

もって患者を診ている」「医療従事者の一員として国民から期待され信頼されている」「だから必死になって勉強しハードワークもいとわない」「インドネシアの課題を自分の言葉で語っている」それに比べて日本の自分たちは全然及ばない、と感じたらしい。この思いが、「もっと勉強しないとだめだ」「日本の特徴を理解し、英語できちんと伝えられないと議論すらできない」に通じているらしい。

さらに「予防と医療を一体化させた診療所システムは、日本の過疎地に応用できるかもしれない」「インドネシアの医学教育は、学生が責任をもって診療し、国民も信頼している、そのなかで医学生は育っている」このような学生たちの考察を聞きながら、これこそが「本当の教育」ではないのかと思った。自ら経験して問いかけ、自らで学ぼうとする。知識を教えこむのではなく、心に灯をともしることが大切なのだ。今回の学生の気づきを生み出したものは何だろうか。それは、学生自身が時間をかけ責任をもって発表スライドを準備したこと、インドネシアの医療の最前線を見学し、ディポネゴロ大学の学生たちと議論し、彼らに追いつけなかった悔しい思いが背景にある。「本気の失敗」には意味があるのだ。鳥取大学の医学生の変化を目の当たりにして、私は一種の感動をおぼえていた。学生を大きく変えてくれたインドネシア研修、それを支えてくれた地域医療学講座の仲間とディポネゴロ大学の人たちに感謝したい。私はインドネシアが益々好きになった。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)